

母子関係における母親の情動発達研究の展望

小 原 倫 子¹⁾

本論文の目的は、母子関係における母親の発達及び情動に関する近年の研究を概観し、母子関係における母親の発達とそのプロセスについての諸問題について考察を行うことである。また、現在までの母親の発達研究に欠落している視点を明らかにする。

本論文では、最初に母親の心理的発達に関する従来の研究について概観し、母親の心理的発達を、情動的側面から検証を行う必要性を明らかにする。

次に、母子関係における情動研究の流れを概観し、母親を主体とした情動発達研究を検証する際の今後の課題と、情動という現象を捉える妥当的な方法について考察する。また、母親の情動発達に影響を及ぼす要因についても、母親の内的要因と子ども要因の両側面から考察する。まとめとして、母子関係における母親の発達を情動的側面から検証するための視点と課題について述べる。

1 母子関係における母親の心理的発達

本節では、まず母親になることによる心理的变化に関する研究についてレビューを行う。次に、母子関係における母親の認知と情動及び応答行動との相互性に関する研究を概観し、母子関係における母親の心理的発達を情動的側面から検証する必要性について考察を行う。

1.1 母親になることによる心理的变化

子どもを産み、育てていく過程で、人は心理的に何が、どのように変化しているのだろうか。多くの研究は、母親になることによる主観的な意識や自己概念の変化、育児に対する態度や意味づけの変化を明らかにしている(柏木&若松, 1994; 徳田, 2004)。柏木&若松(1994)は、親になることによる人格的・社会的な行動や態度の変化を検証し、「柔軟性」「自己抑制」「視野の広がり」など、多岐にわたる人格的变化(親の発達)を見出している。また、徳田(2004)は、0歳から3歳の子どもの育てている母親への詳細な面接調査から、子育ての意味づけを類型化した。その結果「自明で肯定的なものとし

ての子育て」「成長課題としての子育て」など、5つのパターンを明らかにしている。しかし、これらの研究は、生涯発達の視点から、母親の個人的、主観的意識としての態度や意味づけの変化に焦点があてられており、子どもとの相互交渉の中で生じられる母親の変化そのものを取り上げたものではない。(Oster et al, 1992)は、乳幼児期においては、乳児に情動らしき表出が見られたとしても、それは明確な事象との有意なつながりを持たないあいまいなものである可能性が高いことを指摘している。それにもかかわらず、母親たちの多くは、生後1ヶ月の乳児にも多くの情動の存在を仮定している(Johnson, 1982)。

Emde & Sorce (1988)は、特定の情緒に関する明確な仕種がない新生児に対しても、文脈を基にして様々な特異的な情緒を読み取る母親の母性的な応答性は、母子の共感的過程に貢献すると述べている。それ故、日常的な文脈における母親の応答性は、子どもへの応答行動に大きな影響を及ぼすことが考えられる。母親が子どもとの相互交渉の中で子どもの情動をどう認知し、どのように解釈するかという認知的能力の発達は、母子関係において重要な意味を持つことが考えられる。しかしながら、これまでに母親の情動的側面の発達に関する研究はあまり試みられていない。発達初期の不確かな情動表出を示す乳児の情動を、母親がどう認知し、どのように解釈するかという認知的能力は安定した関係性に関連する重要な要因の一つであることが考えられる。また、母親の応答行動が、子どもの発達に及ぼす影響を考えると、母子関係の中で、母親の情動認知がどのように発達していくかについての検証は必要であると考えられる。

1.2 母子関係における母親の認知と情動、応答行動との相互性

佐藤・菅原・戸田・島・北村(1994)は、育児ストレスを「子どもや育児に関する出来事や状況などが、母親によって脅威であると知覚されることや、その結果母親が経験する困難な状態」と定義している。佐藤他(1994)は、育児ストレスの構造を検討し、子ども関連

1) 愛知江南短期大学現代幼児学科

育児ストレスが母親関連育児ストレスに影響し、それが母親の抑うつ感に影響するというモデルを示している。子どもの状態が、母親にとってストレスフルであると評価されることで、母親が育児をストレスとして経験すると述べている。氏家・高濱(1994)、氏家(1995)は、育児における困難な状況をどのように捉えるかという母親の現実知覚=評価様式により、その後の状況の違いが生み出されることを指摘している。従来は、育児の困難な状況要因が母親のストレスに影響を及ぼすという知見が多く見られた。しかしながら、このような知見では、同じ様に育児困難な状況にあっても、育児がストレスになる母親とならない母親が存在するという現実を説明しきれない。氏家の指摘は、これらを説明する新たな視点を提案したと考えられる。それ故母子関係における母親の発達を現実に即した形で捉えるには、子どもとの関係性を母親がどう認知しているか、さらに、氏家(1995)のいうところの、母親の現実知覚=評価様式が発達的にどのように変化していくか、さらに現実の評価と応答行動との発達の变化の関連を検証することが重要であろう。しかしながら、情動に関しては、現象として知覚されにくく、また、その特性を測る方法も開発されていない(Campos, 1998)という理由から、現在までに十分に議論されたとはいえ、検証方法についても様々な研究者が模索している状況である。以下の章では、主な情動研究を概観し、従来の研究から浮かび上がる課題と検証方法について考察を行う。

2 母子関係における情動研究の流れ

～emotional availabilityの観点からの考察

近年、発達心理学の領域では、情動への関心が高まっている。これまでの母子関係における情動研究の多くは、情動表出に伴う行動レベルに焦点を当てたものであり(Hsu & Fogel, 2003)(坂上, 2002)、母親の情動認知についての研究は十分とは言えない。本節では、情動に関する主要な研究の流れを概観する。そのうえで、母子関係という枠組みでの情動研究を検証し、母親を主体とした情動発達において、何が検証され、何が検証されていないかという観点から今後の課題を示す。さらに、妥当的な検証方法についてemotional availabilityの理論的枠組みを用いた研究を概観し、今後の課題について展望する。

2.1 発達心理学における情動研究の流れ

近年まで、情動は科学的研究の対象としてふさわしいものとはみなされてこなかった。情動は、定量化したり客観的に研究することが不可能であるという見方がされ

てきた。なぜならば、情動は、複雑で多面的な現象であり、焦点を当てる側面によりさまざまに定義されるからである。情動研究においては、近年まで情動の機能を進化の文脈に位置づけ、人が生きていくうえで適応上必要なシステムとして捉えた「ダーウィン説」に基づく基本感情理論の立場の研究が多く見られた。基本感情理論の視点は、表情及びそれに対応する基本情動が生得性である可能性を示唆している。それ故、情動は文化普遍的な現象であるという。しかしながら、基本情動のカテゴリーは研究者によって様々であり、普遍的な基本情動の存在が明らかにされているわけではない。個人に特異的で、複雑、多義的な人の情動が、いくつかの基本情動で説明しきれないものなのかという疑問も生じる。最近の情動理論においては、状況に対する評価の結果、状況が個人にもたらす意味から特定の情動が生じる(Lazarus, 1991)という認知的感情理論や、情動とは、人と環境の相互作用において、有意味で妥当的に行動するための準備状態として生ずる行動であり、有意味な事象における人と環境の関係性を変化させたり維持したりするものである(Campos, 1998)という機能主義的情動理論などが見られる。これらの理論には、情動は独立的に生じ、かつ生得的に人に備わっているものではなく、情動は環境との相互作用による社会化の過程を通して獲得されるという基本的な考え方が示唆されている。情動を環境との相互作用に基づく発達の現象と捉えた場合、母子関係における子どもの存在は、母親にとって環境そのものであり、子どもの発達と共に母親の情動も発達していくと考えることが妥当であろう。それ故、日常文脈で生起する母子相互作用という社会的文脈を背景に、子どもとの関係性の中で発達し変化する現象としての母親の心理的発達を、母親による子どもの情動認知と応答行動という情動的側面から検証する視点が重要であると考えられる。

2.2 母子関係における近年の情動研究の特徴

近年、母子関係における情動研究の領域では、子どもの社会情動的発達に対する関心が高まっている。発達研究の方法論として、生態学的研究の重要性から、生活の場における日常文脈において子どもの発達を捉えようとする研究が求められている(木下, 2006)。社会文化的影響が埋め込まれている現実の日常生活の中で生きる子どもの姿を捉えることの重要性から自然場面での観察研究や、質的研究の増加が見られる(松永, 2004)。母子関係における情動研究においても、母子間の相互交渉を微細に検証した事例研究(坂上, 2002)や、母子の食事場面における役割行動の詳細な観察研究から、子どもの

情動発達を理論化した研究が見られる(川田, 塚田一城, 川田, 2005)。これらの研究は, 日常文脈における, 母子関係という最も早期の社会的関係における子どもの発達を母子が互いに影響を及ぼしあう共変化の関係として捉えている。大人と子どもの関わりを一つのシステムとして捉え, 共変化の過程として分析することは, どのようにして様々な能力が出現, 発生するのかという発達のメカニズムの解明に必要な視点であると考えられる。しかしながら, 母子関係における社会情動的発達の関心は主に子どもに向けられており, もう一方の当事者である母親は子どもに影響を及ぼす一要因として扱われることが多い。成人して尚, 人は発達していく存在であるならば, 育児は, 母親にとって新たな社会文化的環境に身を置くことに他ならず, 育児という日常的文脈や, 子どもとの関係性が母親の心理的発達に及ぼす影響は大きいことが考えられる。このような母親の心理的発達に関して, 母親の内面的, 主観的变化にとどまらず, 子どもとの相互作用の中でその変化を捉える試みが重要であろう。また, 母子関係という人生最早期の最も小さい単位での社会的関係における共変化を母親の心理的発達を軸として検証することは, 子どもの発達についても新たな見解を導き出すことになることが考えられる。

Papousek & Papousek (1992) は, 乳児に関わる養育者には, 生得的に乳児の対人相互作用を促進させるある種の生得的機構が備わっており, 特別な学習経験を経なくとも, 意識の関与がなくとも, 状況や乳児の状態から適切な応答行動をとる態勢や構えを直感的育児という概念で説明している。遠藤(1998)は, 関係性という観点から養育者の情動発達に関して従来の研究を概観し, 基本的に乳児に接する養育者は, 乳児の情動表出や行動に対する特異的な感受性や構造化された働きかけのパターンが存在するという見解を示している。確かに, ある種の生得的な感受性や応答行動が, 母親に備わっていることは考えられるものの, 現実の育児においては, 子どもの情動がわからずどのように応答すればよいのかとまどい悩む母親が多く見られる。母親の感受性や応答行動の個人差を生得的なものだけで説明することはむずかしいのではないだろうか。母親による子どもの情動認知や応答行動の個人差は, 母親の気質や環境に影響されることは考えられるものの, 育児とは日々の母親と子どもの相互交渉の積み重ねである。そうであるならば, 母子相互作用の中で, 母親の情動的側面が子どもの情動表出と関連しながら, どのように変化し発達していくかという側面に焦点をあてた議論も必要であろう。Meins et al. (2002) は, 子どもを心を持った存在と仮定して子どもの情動の読み取りや応答行動を行う傾向を mind-

mindednessとして, 愛着との関連について検討している。篠原, 遠藤(2003a, b)は, 母親による子どもの主観的状态の読み取り傾向が子どもの発達に関連するという観点から, mind-mindednessの測度開発の試みを行っている。日常的文脈における子どものVTR映像から母親が読み取る子どもの情動を中心とした主観的状态の差異により, mind-mindednessの個人差を検証している。これらの試みは, 母親の情動認知を母親へのインタビューなどの回顧的情報のみに基づく従来の研究とは異なり, 表出された客観的データから検証していくという点で, 新たな知見が期待される。しかしながら, このような母親の読み取り傾向が, 育児経験に伴いどのように変化していくのかについての検証は十分とはいえず, また, 今後の検証課題として, 情動を中心とした主観的状态の読み取りと母子相互作用場面における応答行動との関連が示されている(篠原 & 遠藤, 2003a, b)。それでは, 母親の情動認知と応答行動は母子相互作用を通じてどのように発達していくのであろうか。コミュニケーションの手段としての言語を持たず, 事象との関連も明確ではない乳児(Oster et al, 1992)となめらかな情動的コミュニケーションを行なうためには, 従来の成人同士における情動的コミュニケーションよりも, 母親の能力がより重要であることが考えられる。Scaffery (1984)は, 発達早期の乳児と母親のコミュニケーションは, 母親がうまく乳児の発達にあわせることにより統制されていると述べている。母親は, 子どもとの相互作用を通して, このような能力を発達させていくことが考えられる。しかしながら, 情動も未分化で, 表出手段も未熟な乳児にうまく合わせる母親の能力とは, 具体的にどのようなものであろうか。Tronick & Brazelton (1980)は, 母親による乳児の情動認知に関して, 1つの指標からだけでなく多次元的な指標を用いることの必要性を示唆している。Bremner (1999)は, 乳児の情動を理解するためには, 乳児の反応だけに焦点をあてるのではなく, それが生じる物理的あるいは社会的文脈全体を考慮に入れる必要性を示している。情動認知に関して, 認知的感情理論や機能主義的情動理論の枠組みで考えるならば, 成人同士であっても, 互いに文脈を考慮した情動の理解や解釈の重要性は同様である。しかしながら, 乳児との相互作用においては, 発達早期の乳児にそのような働きを期待することはむずかしい。それ故に, 母親は自らが認知した乳児の情動が正確であるのかという確認がむずかしい。母親の情動的側面の発達に関して重要な視点は, 情動認知の正確さというよりも, どのように認知したかとその認知に基づく応答行動に対する乳児の応答を繰り返し経験するという点ではないだろう

か。その繰り返し、すなわち、育児経験に伴いより繊細で応答的な能力が体得されていくものと考えられる。また、その際、発達のプロセスは単一ではなく、母親の個人的要因、子ども要因などとの関連から、いくつかの異なる発達のプロセスが存在することが考えられる。そうであるならば、母親の情動的側面の発達の検証には、情動認知とその解釈に基づく応答行動との関連、さらに、子どもの応答行動の変化との関連を詳細に検証することが必要であろう。

2.3 emotional availabilityの特徴

情動を媒介とした母子関係性の概念として emotional availability の研究が見られる。emotional availability とは、母子相互作用における母親による乳児の情緒表現への気づきと共感的な反応、及び母親の情緒表現の提供という一連の応答能力である (Emde & Sorce, 1988)。Biringen (2000) は、Emde の emotional availability の概念を、その特性を図る方法と共により明確に示した。emotional availability とは、母子相互作用における情動を媒介とした関係性を表す概念であり、親と子ども双方の情動信号をお互いに理解することから成立しており、相互作用における行動の量ではなく、文脈において判断される性質のものである Biringen (2000)。それ故に、母子関係における母親の発達を母親の個人的要因の変化としてではなく、子どもの発達に伴う母親の変化として捉えることが重要であることが指摘されている (金丸、無藤, 2004)。また、母親の emotional availability を「sensitivity」「structuring」「nonintrusiveness」「nonhostility」の4種類に分類し、子どもの情緒応答性を「responsiveness to parent」「involvement to parent」の2種類に分類し、母子の相互交渉場面の観察から、情動を媒介とした両者の関係性を捉えようとする試みを行っている Biringen (2000)。

金丸 & 無藤 (2004) は、Biringen (2000) の主張の基に emotional availability を、情動を媒介とした関係性としての母子相互の情動の利用可能性として位置づけ、乳児の情動調整プロセスとの関連について検証を行っている。しかしながら、母親の emotional availability における認知的側面についての研究はあまり見られない。

近年、情動研究において、認知的側面との相補的観点からの報告が見られる (遠藤, 2002)。情動とは認知と協調的に結びつき、人間の生物学的、社会適応を保証する心的装置であり、情動と認知の界面に位置するものとして情動認知も含めた情動的知性の重要性が示唆されて

いる (遠藤, 2002)。情動的知性については心理学的に様々な検討がなされてきているが (Goleman, 1995)、その定義の広さから明確な知見が得られたとはいえない。遠藤 (2002) は情動理解、情動制御、情動表出の3つの側面から情動的知性の構造について概観している。乳児の情動発達における社会的機能として重要な意味を持つ母親の情動的機能としての emotional availability についても、母子関係の中での母親の応答行動だけでなく、母親の情動認知の検討及び情動認知と母子の応答行動との関連を検討することで、emotional availability の構造の検討が可能となることが考えられる。母親が乳幼児の情動をどのように読みとるかを把握するツールとして IFEEL Pictures (Infant Facial Expression of Emotions from Looking at Pictures) が開発されている (Emde, Osofsky, & Butterfield, 1993)。IFEEL Pictures (以下 IFP) は、前後の状況が明らかではない30枚の乳幼児の表情写真を通して、母親が乳幼児の感情をどのように読みとるかを把握するツールである。それ故、日常的な場面における両者の相互作用を実際に観察しているものではない。しかしながら、前後の状況が明らかではない乳幼児の表情写真のみでも成人の情緒認知はほぼ一致することが示されている (Emde et al, 1985)。また育児中の女性では、写真から読みとった情緒と次に起こす行動との間に一定の関係があることが示されている (Sorce & Emde, 1982)。したがって、IFP は母親による子どもの情動認知を簡便に把握することが可能であると考えられる。

Emde らの IFP をもとに、井上・濱田・深津・滝口・小此木 (1990) は、生後12ヶ月の乳幼児の写真30枚で構成された日本版 IFEEL Pictures (以下 JIFP) を開発した。JIFP もまた、母親による子どもの情動認知を把握する尺度の一つと考えられる。JIFP を用いた研究には母親の情動共感性及び母親の情緒応答性と育児困難感との関連についての検討 (小原, 2005a) や、母親による乳幼児の情動の読み取り反応をカテゴリー化し、その反応特徴について検証したものがある (平野ほか1997)。しかしながら、JIFP の尺度としての妥当性は十分に議論されたとはいえず、JIFP で測られた認知的側面と実際の応答行動がどのように発達の関連するのかという検証は、JIFP の尺度としての妥当性を検証するうえでも、また、母親の情動発達を検証するうえでも重要な課題と考えられる (小原, 2005a)。Emde (2000) は emotional availability の研究を概観し、今後の研究課題として、情緒応答性の発達の变化、すなわちプロセスについて明らかにする必要性を指摘している。emotional availability が母子相互作用における情動を媒

介とした関係性を表す概念であるならば、この指摘は当然であろう。emotional availabilityの枠組みに基づき、認知的側面も含めた構造的な解明と発達的な変化を時系列的に検証していくことが、母親の情動的側面の発達を明らかにすることにつながるであろう。

2.4 母親の情動認知と応答行動の発達に関連する要因

母親の情動認知と関連する母親の内的要因の1つに、情動共感性が考えられる。共感性については研究者により様々な定義が成されているが、本論文における情動共感性とは、Stotland (1969) による「他人が経験しているか、または経験しようとしている情動状態を知覚したために観察者にも生じた情動的な反応である」という情緒面を重視した情動共感性の定義に基づく。西野 (1988) は、母親の情動共感性が高いと子どもへの Maternal Speech が多くなり、子どもに応じてコミュニケーション形態を調整する能力が高いことを認めている。渡辺・瀧口 (1986) は、情動共感性の中でも感情的暖かさの高い母親は、子どものポジティブな共感性を高めるととらえている。つまり、母親の情動共感性は、情緒発達の未熟な乳幼児とコミュニケーションをするための母親の基盤となる要因であることが考えられる。

また、母親の情動認知と関連する母親の内的要因に、母親の抑うつ感があげられる。母親の抑うつ状態と育児感情や育児行動との関連の高さは、発達心理学やメンタルヘルスの視点から、多くの研究により明らかにされてきた。しかしながら、子どもの状態や子どもとの関係性における母親の評価が、その後の母親の育児行動や育児感情と関連することが示されている (氏家・高濱, 1994; 氏家, 1995)。小原 (2005b) は、母親の抑うつ感と、母親による子どもの不安感情の認知との関連を示唆している。母親の抑うつ感は情動認知に影響を及ぼす要因であることが考えられる。

さらに、母子関係における母親の発達に最も大きな影響を及ぼす要因は子どもの発達の变化であろう。母子関係における情動研究においても、日常文脈における、母子関係という子どもにとって最も早期の社会的関係における子どもの発達を母子が互いに影響を及ぼしあう共変化の関係として捉える研究が近年増加している。(坂上, 2002) (川田, 塚田一城, 川田, 2005)。しかしながら、母子相互作用の研究においては、子どもの発達に焦点づけられたものが多く (Hsu & Fogel, 2003), 母子相互作用場面における、母親の応答性の発達プロセスについての研究は、十分ではない。遠藤 (1998) は関係性の発達という視点から、子どもの情動発達に関する従来の研

究を概観し、乳児に対する母親の働きかけには、乳児の運動パターンや情動表出などの社会的アフォーダンスに対する特異的な感受性、及び構造化された働きかけのパターンが生得的に存在する可能性を示唆している。しかしながら、このような母親の感受性やパターンが、子どもの発達の变化に伴い、いつ頃、どのようなきっかけで発現し、変化していくのか、あるいは、発現しないのかという母親の個人差についての検証はこれからの課題である。

一方、母子関係における母親の情動認知と応答行動が育児感情に影響を及ぼすという知見がある。荘厳・益谷・今川・中道 (1989) は、母子相互作用における母親の応答性や反応性は、母親の感情的安定と密接に関連していると述べている。田島 (1997) は、母子関係初期の母性感情には自尊感情などの母親要因が影響を及ぼすが、母親としての経験を重ねることにより、母子相互作用そのものが育児肯定感や母親の自尊感情に影響を及ぼすことを示している。以上の先行研究から、母親の情動認知と応答行動は、発達的に育児感情と関連することが考えられる。その際、母子関係の初期においては、母親要因の影響が強く、育児経験を重ねることにより、母子相互作用要因が強くなることが考えられる。しかしながら、母親要因と母子相互作用の関係性や、また、それらと育児感情困難感との関連についての実証的な研究は少ない。母子関係の時系列的データに基づく検証が今後の課題といえよう。

3 母子関係における母親の発達を情動的側面から検証するための課題

ここまで、母親の心理的発達と母子間の情動発達について概観し、情動的側面から母親の心理的発達を検証する重要性を述べてきた。本節では、ここまでの議論をまとめ、母子関係における母親の心理的発達を情動的側面に焦点をあてて検証するための視点と課題について述べる。

視点の1つは、育児という日常的現象の中で変化する母親の発達を、実態に即した形で明らかにしていくために、母親の個人的、主観的意識としてではなく、子どもとの相互交渉の中で生起される母親の変化に焦点を当てて検証するという視点の重要性である。その際、母親による子どもの情動認知は、その後の母親の応答行動にも影響を及ぼし、さらに子どもの発達とも関連することが予測されるため、母親の情動的側面の発達の变化に焦点をあてて検証する必要がある。

2つめの視点として、情動については、様々な立場があるものの、発達という側面から情動を捉えようとする

場合、情動は独立的に生じ、かつ生得的に人に備わっているものではなく、環境との相互作用による社会化の過程を通して獲得されるという基本的な視点に立つことが必要であると考えられる。とりわけ、母子関係における母親の情動発達を明らかにしていくためには、子どもの発達の变化との関連に焦点をあてて検証していくことが重要な課題と考えられる。

以上の視点から、母親の情動発達に関する研究を行うためには、縦断的データに基づく発達プロセスの詳細な記述が不可欠である。また、そのような発達がなぜ、どのような要因から生じるのかというメカニズムの解明も必要であろう。そのためには、数量的に平均化され、加工された単一的な発達プロセスを示すような分析だけでは、複雑な現象を捉えることはむずかしい。日常的文脈における多くの事例に着目し、詳細かつ精緻な質的分析も併せて行い、その個人差と共通性を明らかにすることが、必要であると考えられる。

文 献

- Biringen, Z. 2000 Emotional availability: Conceptualization and research findings. *American Journal of Orthopsychiatry*, 70, 104-114
- Bremner, J. G. 1999 乳児の発達 (渡部雅之, 訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Bremner, J. G. (1994). *Infancy* (2th ed). Oxford: B. Blackwell
- Campos, J 1998 Emotional development: action, communication, and understanding. Kelly A Franklin. (Ed), *child psychology* 5th ed. pp237-310.
- Emde, R. 2000 Next steps in emotional availability research. *Attachment & Human Development*, 2, 242-248.
- Emde, R. N, Izard, C., Huebner, R., Sorce, J. F., & Klinnert, M. 1985 Adult judgments of Infant Emotions: Replication studies within and across laboratories. *Infant Behavior and Development*, 8, 79-88
- Emde, R. N, & Sorce, J. F. 1988 乳幼児からの報酬: 情緒応答性と母親参照機能. 小此木啓吾, 監訳) 乳幼児精神医学 (pp.25-48). 東京: 岩崎学術出版社. (Emde, R. N, & Sorce, J. F. 1983 The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In J. D. Coll, E. Galenson, & R. L. Tyson (Eds.), *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York: Basic Books.)
- Emde, R. N, Osofsky, J. D, & Butterfield, P. M. (Eds.) 1993 *The IFEEL Pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions*. Connecticut: International Universities Press, Inc.
- 遠藤利彦 1998 関係性と子どもの社会情緒的発達—日本の乳幼児研究の1年を振り返る— 教育心理学年報, 37 37-54.
- 遠藤利彦 2002 発達における情動と認知の絡み. 高橋雅延・谷口高士 (編), 感情と心理学: 発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展 (pp. 2-40). 京都: 北大路書房
- Goleman, D. 土屋京子 (訳) 1996 EQ~こころの知能指数 東京: 講談社. (Goleman, D. 1995 *Emotional intelligence*. New York: Bantan Books.)
- 平野直巳・森さち子・井上果子・濱田庸子・滝口俊子・深津千賀子・小此木啓吾 1997 日本版 IFEEL Pictures: 母親への施行結果からの特徴の検討 心理臨床学研究, 15, 144-151.
- Hsu, H, & Fogel, A. 2003 Stability and transitions in mother-infant face-to-face communication during the first 6 months: a microhistorical approach. *Developmental Psychology*, 39, 1061-1082.
- 井上カーレン果子・濱田庸子・深津千賀子・滝口俊子・小此木啓吾 1990 乳児の写真から情緒を認知する能力の判定: Japanese I Feel Picture Test. 家族療法研究, 7, 30-40.
- Johnson, W., Emde, R. N., Pannabecker, B., Stenberg, C., & Davis, M. 1982 Maternal perception of infant emotion from birth through 18 months. *Infant Behavior and Development*, 5, 313-322.
- 金丸智美・無藤 隆 2004 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差 発達心理学研究, 15, 183-194.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 川田・塚田一城・川田 2005 乳児期における自己主張の発達と母親の対処行動の変容: 食事場面における生後5ヶ月から15ヶ月までの縦断研究 発達心理学研究, 16, 46-58.
- 木下孝司 2006 認知発達研究からみた乳幼児研究の動向と今後の課題 教育心理学年報, 45, 33-42.
- Lazarus, R. S. 1991 *Emotion and Adaptation*.

- New York: Oxford University Press.
- 松永あけみ 2004 乳幼児期の社会情動的発達研究の動向を探る一人とのかかわりと自他理解を中心にして—教育心理学年報, 43, 38-47.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Gupta, D. M., Fradley, E., & Tuckey, M. 2002 Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development*, 73, 1715-1726.
- 西野美佐子 1988 Maternal Speechに関する研究(2): 情動的共感性と子どもとの接触経験とに関連して 東北福祉大学紀要, 14, pp.211-223.
- 小原倫子 2005a 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連 発達心理学研究, 16, 92-102.
- 小原倫子 2005b 母親の抑うつ及び情緒応答性と育児困難感との関連 小児保健研究, 64(4), 570-576.
- Oster, H., Hegley, D., & Nagel, L. 1992 Adult judgements and fine-grained analysis of infant facial expressions: Testing the validity of a priori coding formulas. *Developmental Psychology*, 28, 1115-1131.
- Papousek, H., & Papousek, M. 1992 Beyond emotional Bonding: The role of preverbal communication in mental growth and health. *Infant Mental Health Journal*, 13, 42-52.
- 坂上裕子 2002 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達的变化: 母子における共変化過程の検討 発達心理学研究, 13, 261-273
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則 1994 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, 64, 409-416.
- Schaffer, H. R. 1984 *The child's Entry into a Social World*. London: Academic Press.
- 篠原郁子・遠藤利彦 2003a 母親による乳児の主観的状态の読み取り—mind-mindedness測度開発の試み— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 121.
- 篠原郁子・遠藤利彦 2003b 養育者による乳児の主観的状态の読み取りと相互作用の在り方について①—言語的関わりとの関連性の検討— 日本教育心理学会第45回大会発表論文集, 347.
- Sorce, J. F., & Emde, R. N. 1982 The meaning of infant emotional expressions: regularities in caregiving responses in normal and down's syndrome infants. *J. Child Psychol Psychiat*, 23(2), 145-158.
- Stotland, E. 1969 Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp271-314). New York: Academic Press.
- 荘厳舜哉・益谷真・今川真治・中道正之 1989 母親の感情表出スタイルと13か月齢の子供の感情行動 教育心理学研究, 37(4), 353-358.
- 田島信元 1997 母子相互交渉と母性形成との関係に関する短期縦断的研究 性格心理学研究, 6, 40-49
- Tronick, E. Z., Als, H., & Brazelton, T. B. 1980 Monadic phases: a structural descriptive analysis of infant-mother face-to-face interaction. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development*, 26, 3-24.
- 徳田治子 2004 ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ—生涯発達の視点から 発達心理学研究, 15, 13-26.
- 氏家達夫 1995 親になるプロセス 金子書房
- 氏家達夫・高濱裕子 1994 3人の母親-その適応過程についての追跡的研究 発達心理学研究, 5, 123-136.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, 34(4), 324-331.

(2006年9月29日 受稿)

ABSTRACT

Review of Emotional Development Research of Mother
in Mother-Child Dyad.

Tomoko OBARA

The purpose of this study is to examine recent study of mother's development and emotion, and to consider mother's development process in mother-infant relationship. In addition, it clarifies lacking points of view involved with developmental study of mothers. First, this study examines studies of mothers' development in the past, and to clarify the need to verify it in emotional aspects. Second, this study aims to examine recent studies of emotion, and it considers problems to be solved in verifying studies of emotional development in mothers, and to consider appropriate ways to find emotional phenomena. Third, this study considers the factors which affect mothers' emotional development looking at the mothers' internal aspects and infants' aspects. Finally, this study discusses points of view and problems in order to verify mothers' emotional development in mother-infant relationship.